

## 認知症と共に生きるまち（認知症パッケージ事業）から見えてきた課題

認知症に対する偏見の解消や早期に医療機関受診につながるよう市民の意識変化を目指し、認知症パッケージ事業を進めていく中で、見えてきた課題について意見をいただきたい。

### 課題1 「脳のいきいきチェック」の受検者が少ない。

事業の目的：認知症の人とその家族等の「気づき」による早期発見・早期対応を支援

#### 【主な活動・実績】

R6年度（7月～3月末） 106人（薬局：87人・通いの場等：19人）

R7年度（4月～1月末） 161人（薬局：62人・イベント等；99人）

※ 全体の受検者は増加しているものの、**保険薬局**での受検者はR6年度より25名減っている。R7年度は、イベント会場での受検が99名と受検者全体の半数以上を占めている。

#### 【考えられる要因】

- ① 物忘れ等が気になっても、認知機能の低下を指摘されることが怖くて受検しない。
- ② 保険薬局での受検は事前予約が必要であるため、処方薬の受取日に受検することができず、予約後に出直す必要があり気軽に受検することができない。
- ③ 薬剤師が受検勧奨の声かけに抵抗がある（検査を進めた際に「私のことを認知症だと思っているのですか」と返された。）。

#### 【R8年度取組案】

##### ① 各種イベント会場等で「脳のいきいきチェック」を積極的に行う。

イベント会場では、予約せずに気軽に受検できるため、抵抗感が少なく気軽に受けられる（検査時の個人情報の保護に配慮が必要）。

##### ② ケアマネジャーが対象者に積極的に受検勧奨をする。

保険薬局で受検することが難しい場合は、対象者宅で、ケアマネジャーが脳のいきいきチェック（簡易版）を実施してはどうか。

対象者のことをよく知っているケアマネジャーが受検勧奨することで、検査の必要性等が伝わりやすく、検査結果で認知機能の低下が見られたとしても、その後の相談やケアにつなげやすい。

#### 検討事項1

「脳のいきいきチェック」をより多くの方に受検していただくためのアドバイス

- 取組案への意見
- その他の提案

## 課題2 地域に「新しい認知症観」を根付かせるための啓発活動が不十分

“認知症になったら、何も分からなくなる、何もできなくなる”といった認知症に対する偏見は地域に根強く残っている。この偏見が認知症の相談や受診の妨げとなっている。そのため、『早期発見・早期対応』の取組をすすめると同時に、認知症に対する偏見を払拭していくための啓発活動を実施する必要がある。

### 【主な活動・実績】

#### 認知症サポーター養成講座

全体（R6年度：625名 R7年度1月末：590名）

- ・学校等で実施（R6年度：7カ所 243名 R7年度1月末：7カ所 176名）
- ・企業等で実施（R6年度：4カ所 61名 R7年度1月末：2カ所 31名）

※ R7年度、小中学校等で実施する際には、社会福祉協議会が実施する福祉教育（高齢者疑似体験）と協働で実施することで、高齢者の生活や気持ちをイメージしやすくなり、認知症の人についての理解も得やすかった。

### 【R8年度の取組案】

#### ① 企業や学校等での認知症サポーター養成講座の実施回数を増やす

R7年度から、新しい認知症観を取り入れた内容に変更

寸劇や認知症ご本人のメッセージを盛り込み、受講者に認知症は誰でもなる可能性があり、認知症になったとしても役割を持って過ごせることを知ってもらい、認知症の人に寄り添った対応方法について学ぶことができる。この新しい認知症観の啓発を多世代に広げたい。特に企業や学校での実施を積極的にすすめていく。

#### ② 認知症地域支援推進員が中心となり、9月に啓発イベントを実施する

より多くの方に新しい認知症観について知ってもらう機会をつくるため、呉市で活動をしている20名の認知症地域支援推進員が中心となり企画する。

### 検討事項2

『新しい認知症観』の啓発方法のアドバイス

- 取組案への意見
- 認知症サポーター養成講座を実施したら良い団体、事業所等の提案

## 課題3 認知症パッケージ事業に関する各団体が考える課題

### 検討事項3

- 改善が必要な事項
- その他